

# 「異文化」の理解を目指した研修旅行 (I)

—日本語・日本文学・日本文化系コースにおける実施のあり方—

## A Study of Field Trips to Understand Different Cultures (I)

—Practices held during the Japanese Language and Culture Courses—

秋 枝(青木) 美 保 ・ 戸 田 利 彦  
Miho AKIEDA(AOKI) and Toshihiko TODA

This paper focuses on field trips held during the Japanese language and culture courses of a university. These field trips are planned and are put into practice for the purpose of understanding different Japanese cultures including Japanese traditions and modern cultures. These activities lead to reform the present general education system of Japanese universities. Practices that put an important role on personal experiences outside class revitalize the university instructions which are mainly done by lectures in class.

Two field trip practices in Hijiya University are analyzed based on questionnaires filled out by participants. Then, problems are summarized for future plannings and practices.

### はじめに

カリキュラムの大綱化という大号令のもとに、各大学はカリキュラム改革に取り組み、その結果「一般教育」という名前は、カリキュラムの中から姿を消した。しかし、そこに生じた問題が、最近様々な形で取り沙汰されてきている。それは、大学における「教養教育」とは何かという問題についてである。大学の大量化が進み、戦前の大学とは性格的に異質なものになってきた現在の大学において、大学の教育目標は、どこに据えていけばよいのか。特に「実学」に対して「虚学」と言われる文系の学部においては、その教育目標の定めにくさは、現実の授業にも如実に反映して、その学部の存立の危うさにそのまま繋がっていると言ってよい。

その切実な問題意識から、大学における「教養教育」建て直しの動きが出始めている。その中で先駆的な動きを示したのが、東京大学教養学部基礎演習の教科書として編集された『知の技法』(小林康夫・船曳健夫編, 東京大学出版会, 1994・4)である。授業の担当者全員が、各専門の立場から、「知」のあり方を分かりやすく解説したものであるが、その中に、この基礎演習の授業そのものを研究対象とした「現場のダイナミクス アンケート——基礎演習を自己検証する」(丹野義彦・認知行動病理学) (P44) がある。その中で、丹野は、日本の大学教育における教養教育のルーツを二つ挙げている。一つは「戦前の旧制高校」における「外国語を中心とした人文主義的な『教養教育』」であり、また「全寮制」において実現した「寮生同士・先輩・教官といった学寮生活の

人間関係」の中で得られた「強烈な人格的な影響」だという。もう一つは、「アメリカのリベラルアーツ」、「広い意味の基礎的な教養教育」である。それは、「日本の文学部・理学部・教養学部などの教育」にあたる。ちなみにアメリカでは、「日本の法学部・医学部・経営学部」にあたる職業専門教育は、大学院で行われている。

戦後、日本の新制大学は、「アメリカ型大学教育」を移植する形で作り変えられようとした。つまり、旧制高校で行われていた教養教育を四年生の大学に移し、旧制大学で行われていた職業専門教育を大学院へ移そうという計画である。ところが、結果的には、「大学四年間に、教養教育と職業専門教育をむりやり同居させてしま」うかたちになった。そのため、「きわめて窮屈」となり、「前期課程教育」（一般教育）については、その発足の「不幸な事情」が「現代まで綿々と尾を引いた」のであった。そして、その「一般教育」なるものは、次第に「空洞化」し、遂に解体していった。

そういった動きの中で、この東大教養学部の基礎演習は、「これまで歴史的に空白だったリベラルアーツの中核を充填していく試み」であると説明されている。これからの大学は、この東大のように本来のアメリカ型大学教育の方向をとるのか、あるいは職業専門教育的な方向（アメリカ型大学院）を目指すのか、その選択をまず迫られるであろう。雑誌『文学』（岩波書店）の最新号（1996秋号）が、やはり「教養の領分」という特集を組んでおり、大学の教養教育について触れているが、その中の座談会「憂鬱なる教養」において、有馬朗人は、「私が、一つ気になっているのは、いったい大学はどちらの道を皆さんお取りになるのですかということです。見ていると、東大ぐらいは教養学部を一生懸命守っているけれども、ほかの大学は教養を解散しちゃったわけね。それじゃ皆さんポリテクニク型（筆者注、アメリカ型大学院）に徹するんですか、という当たりが私の大学における教養のあり方に対する疑問なわけね。そのへんをどのくらい、今の大学人は覚悟しておられるのか、自覚しておられるか」（P6）と、手厳しい疑問を投げかけている。

大学が大衆化の方向を辿ってきた現状からしても、今の大学を「職業専門教育」的な方向に延ばしていくのは、やはり無理があるのではなかろうか。とすれば、戦後中途半端なままに解体してしまった教養教育を新たな形に立て直すという方向が、もっとも現実的なように思われる。「アメリカ型大学」の教育目標を、丹野は、「個々の分野の専門家やエリートを養成することよりも、狭い専門にとらわれずに、広い視野から総合的に判断し、知識を批判的にとりいれ、民主的社會を作っていく実行力のある市民を養成することにある」と説明している。今、大学がすべきこととして、非常に説得力のある教育目標である。大学教育は、これから学生数の減少に伴って、様々な外部の動向に影響をうけ、相当な動揺期を迎えると思われるが、その中でも、肝に命じておきたい一項である。

さて、本論の問題は、そういった現状を踏まえながら、新たな教養教育の目標を具現化するために、具体的にどのようなカリキュラムを打ち立てていくか、まずその試みの一つを示すことである。ここで問題にするのは、日文（日本語・日本文学・日本文化）系の学科におけるそれについてである。そのように新たな企画を立てていくときには、丹野が分析したように、まず、過去の例の中から、モデルを探す必要がある。そこで、臆気ながら、旧来の国文系の学科で行われていた「万葉旅行」といった名称で呼ばれていた研修旅行が浮かび上がってきたのである。それは、文字通り、日本文学の原点と見なされていた「万葉集」の舞台を訪ねて、日本文学発祥の地に立つという意味があったと考えられる。また、学生と教員が共に旅をし、古典文学を築いた先人の後を辿りながら、その文学の理解を深めるといふ、総合的な体験をねらった企画であったことは言うまでもない。例えば、広島大学における国文系の学科における「万葉旅行」にその典型を見ることが出来る。関係者によると、この企画は、その前身である広島高等師範始まって以来のものという。

日本の教育企画における「旅行」ということをとれば、また非常に面白い事実が浮かび上がる。

白幡洋三著『旅行ノススメ——昭和が生んだ庶民の『新文化』』(1996, 6, 岩波新書)によると、「修学旅行」が、学校のカリキュラムとして設定されたのは、明治十年代で、主として「師範学校」が多かったという。「修学旅行」という表現が初めて使用されたのは、明治十九年十二月で、東京師範学校が行なった生徒の「長途遠足」を『茗溪会雑誌』(第四十七号, 明治十九年十二月)が「修学旅行」としたのが、始まりであるという。明治二十一年には、修学旅行は尋常師範学校の恒例行事として文部省令に規定された。さらに、明治三十三年十一月、文部省普通学務局長・沢柳政太郎の序文を付けて出された「独国の修学旅行」という冊子には、このような「修学旅行」の明確な定義が見られるという。

修学旅行とは学校生徒が一人以上の教師の指揮の下に少くとも二日(宿泊をなして)旅行して体育・智育・情育・意育に等しく益せしむることをいふ。(P122)

ここから言えることは、修学旅行が、「体育・智育・情育・意育」という多面的な能力啓発をねらった総合科目として設定されていたことである。交通機関が発達していなかった当時は、まずその場所に行くことがすでに「体育」的な鍛錬の場であつたであろうし、また、「智育」は、教室を出て、実践的に知識を深めるということであるし、「情育」は、学生同志、学生と教師との人間関係を深めるといったことを含めた感性の教育をさすであろうし、「意育」は、目的を遂行する意志の鍛錬を目指すということであろう。このように尋常師範学校(17歳~20歳の学生を対象とする)における修学旅行が、後に高等中学校、尋常中学校、高等小学校等その他の学校へと広がっていったというのが実情のようである。このような歴史的経緯を踏まえると、「修学旅行」は、日本の教育における教養教育の具体像として、その原点に位置づけられると言っても過言ではない。この点に関して、白幡は、修学旅行は、百年を越す歴史を持っており、「その普及の広さ、長い歴史から考えても、他の文化圏にはみられない日本文化の一つとして定着しているというほかない」と言っている。このように、修学旅行は、日本的風土を基盤とし、日本の教育文化の中で創造され、継承されてきた独特の教育企画であり、その本来めざすところは、全人的な教養教育なのである。

ところが、現代においては、修学旅行について、反対意見も多い。中・高においては、個性尊重教育の面から、従来の修学旅行が、自主的にものを見る場面がなく、教育効果が薄いという意見があること、また、受験体制の中で、進学校においては、教室での授業重視の傾向が強く、教室外学習が軽んじられる傾向にあるという。だが、修学旅行がもともと尋常師範学校の生徒を対象とする企画として始まったことを考えると、それらの欠点は、その対象が低年齢の生徒に降ろされたことによって生じた企画上のずれとも考えられる。今一度、修学旅行の原点に立ち返って、その指導の目的や効果について考え直す必要がある。

これまでの修学旅行実施の長い歴史の中で、実施が不可能であったのは、戦時中のみだという。それは、人間の行動が国家権力によって様々な点から規制をうけた不幸な時代であった。今、そして、その「修学旅行」の是非が、改めて議論の俎上に上っているのである。長く続いてきた「修学旅行」の位置づけの、現代におけるこの変化は何を示しているのだろうか。それを考察し、その上で今後のあり方を検討していく必要がある。教養教育の一環としての研修旅行のあり方を考究することは、21世紀に向けて、大学の教養教育のあり方へ示唆するところも多い。

そこで、本稿では、今後の、大学の日文(日本語・日本文学・日本文化)系の学科における研修旅行のあり方を考察すべく、その一つの例として、賛否両論を背景に実施した二回の研修旅行(関西地区)の実態について報告し、合わせて今後の、日文(日本語・日本文学・日本文化)系の学科におけるカリキュラム研究調査の問題提起としたい。

## I. 「異文化」の理解と研修旅行

### 1. 「異文化」の理解とその教育

「異文化」の理解を目指した研修旅行を考察するために、ここではまず、「異文化」の概念及び「異文化」の理解を目指した教育の内実について述べておきたい。

ここでいう「異文化」は必ずしも「外国文化」を意味しない。確かに「外国文化」は、我々日本人にとって文化間距離つまり文化の差が大きく、「異文化」として認識され易い。しかし、文化の差が、本来程度の差である点において、「異文化」とはより身近な人的・社会的諸現象をも包含し、究極的には一人一人の人間の価値観や行動様式をもその範疇に入れうるものと言えよう。その意味において、「異文化」は、“自分の帰属する文化から距離の大きい異質な文化”というよりも、“個としての人間が、自らの認知枠の中で帰属意識を持たないあるいは持ちえないと認識する人的・社会的諸現象”にとらえる方が实际的である。

では、「異文化」としての認識、すなわち「異文化意識」は、何を要因として形成されるのか。その主たる要因として、価値観、行動様式などの人間の本源そのものにかかわるものや、言語、身体・造形などの言語以外の表現様式、人間の所産としての風俗・習慣、衣食住を中心とする生活様式、人間の集合体としての社会集団の構造や機能、また、これら諸現象の背景としての気候・風土などを挙げることができよう。例えば、我々は「アメリカ人の個人主義」「関西人の対人態度」「英語」「大阪方言」「万里の長城」「京都の町並み」と接触した際、それぞれに「異文化」を意識する可能性を有するのである。そして、それらは、要因であると同時に「異文化」の理解の具体的な対象となる。

以上のように、理解の対象としての「異文化」は、「外国文化」をその最も明示的なものとしつつ、個々の人間の価値観や行動様式をも包み込む奥行きと広がりを持つものと言えるのである。

さて、このような「異文化」を対象とし、その理解を促す教育とはいかなるものか。この点に関して、倉地(1990)は、主として外国語教育の立場から“学習者の目的文化理解を目指す教育”にあたって、次の3点に留意することの必要性を述べている。<sup>1)</sup>(1)個々の学習者の、能動的な内的プロセスを重視し、理解の自己発見的な要素をもっと重視しなければならないこと、(2)現実諸相や他者との接触の重要性を認識しなければならないこと、(3)理解のための雑多な手掛かりを与えるのみでは学習者は決して本質的な理解には到達し得ないこと。これら3点は、それぞれ、(1)は学習者自らの問題意識に基づく自己発見的理解の重要性に、(2)は教室外のみならず教室外における対象との直接接触の大切さに、(3)は対象との接触によって得られた様々な情報の背景にある本質をとらえることの意義に言及していると言えよう。「異文化」の理解を目指す教育は、このような留意点をふまえた方法によって実施されるものであり、またその目的は、“他者の所産としての「異文化」を通して自己の視野の拡大と認識の深化を促し、価値ある「異文化」に対する敬意・感謝の念と自らも価値ある文化を創造しようとする意欲を持った人間を育成すること”にあると考える。

### 2. 「異文化」の理解と研修旅行

ここでは、「異文化」の理解を目指した教育の一環としての研修旅行について考えておきたい。

“はじめに”で言及したように、修学旅行の淵源は、「体育・智育・情育・意育」の多面的な能力の啓発にある。研修旅行を大学の教養教育の具体的実践の一つと位置付けた場合、それは、「体育」はともかくとして、より質の高い「智育」「情育」「意育」をねらいとすることになる。このねらいを具現化する一つの方法として、「異文化」の理解を目指した研修旅行は有効に機能するのではなかろうか。まずは日本の文化・社会の現況やその背景としての歴史遺産に直接接触し、それらを自己の認知枠を通して認識し、自らの問題意識に基づいて自己発見的に理解し、合わせてそれら

の背景にある本質を把握する「異文化」理解の活動を通して、自己の視野の拡大と認識の深化、価値ある「異文化」に対する敬意・感謝の念と文化創造への意欲の育成が図られることになるのである。このような教育活動は、質の高い「智育」「情育」「意育」として機能する可能性を有している。そしてそこで学生たちが実践的で総合的な能力を獲得することは、大学における教養教育の最終目標としての「民主的な社会を築く実行力を持った若者の育成」に連動することになるのである。

## Ⅱ. 日本語・日本文学・日本文化系コースにおける研修旅行

### (1) 研修旅行とフィールドワーク——専門教育への導入

国語学的な研究、特に方言研究では、フィールド・ワークは欠かせないものであり、今更言うまでもないが、言語文化研究一般においても、それは、重要な要素の一つである。言語文化の研究においては、何らかの形でその文化が生まれる背景となった人、時間、場所に触れることになるからである。そのことは、人文系の研究においては、ジャンルに係わらず、一般的に言えることであろう。

とりわけ、近代文学の研究においては、80年代から、人間の新しい生の形を、都市空間の動態との関わりのなかで見ていくという視点が打ち出された。（前田愛『都市空間のなかの文学』昭和57・12、筑魔書房）つまり、都市空間は、人間の動態を映す生き物であるという見方である。例えば、鷗外の小説「舞姫」における「ベルリン」の街の詳細な分析、また、永井荷風の小説「狐」における東京の街の分析と主人公の意識との関係の指摘等である。その人間研究の視点は、より動的な人間のとらえ方として、文学作品の新しい側面を引き出してみせた。

そういった動きは、こと文学研究に限らず、80年代から人文系の一部の分野で見られるようになった。前田は、次のように言っている。（『前田愛著作集 第5巻』P402）

ところで、都市というものは都市工学とか都市社会学、都市政策学とかいうような様々な学問領域で論じられてきたんですけども、記号論的に都市をとらえていく考え方はごく最近になってあらわれてきた動きである。たとえば、新宿の盛り場を歩いていますと、やはりここは新宿だなという感じを皆さんおもちになると思うんです。そういうその感じというか気配というものはなかなか言語化しにくい、あるいは理論化しにくい。それは都市工学とか都市社会学、そういう理論の網の目ではもれてしまうところがあるわけです。〔中略〕記号論的に都市を考えるというのは、これは都市がわたしたちに向けて発信している様々なおびただしいメッセージを解読するということである。そしてまた、都市というものを、われわれが生きる空間、生きられた空間として把握するという、そういう見方をすることになると思います。つまり、都市というものを一つのテキストとして読んでいくことである。そしてまた、都市というものの人間的な側面を明らかにしていくことである。つまり都市というものを、つくられていくものとしてよりもまず現在あるものとして、それに隠されているメッセージ、そしてまた表面に浮上しているメッセージというものを様々な仕方で解読していく、そういうことだろうと思うわけです。（講演「都市を解読する」昭和56・9『説き語り記号論』収録）

ここに提唱されたフィールドワークには、従来の「万葉旅行」的な、過去の歴史の場に思いを馳せるというのみではなく、現在の問題を、生きた現実の都市空間の中に立って、アクティブに発見するという意味合いが含まれている。都市空間には、勿論古くからある文化と新しい文化が同居しているのであるが、その中に立つと、その二つの文化の関係が生きた現実として捉えられると言ってよい。それが、すなわち常に変化しつつある都市の動態そのものであり、人間の生活

の現実相の一つの姿であると言えよう。

前田の論は、文学研究の新しい方法として、当時大変な脚光を浴びたが、今読みなおすと、インターネットブームの中で、思考の中から切り捨てられていくであろう、現場からの発信による人間認識の方法として、重要な提言をしているように思われるのである。そのことは、言語文化研究全般に渡って、特に現代的なセンスを鍛えるという意味で、現代文化学部における教養教育の根幹に位置づけられる可能性を有しているといつてよい。そこに新しい発想で設置された現代文化学部において実施される研修旅行の一つの形を見ることができるとはなからうか。

## (2)近隣大学の実態

ここでは、広島市内の近隣大学の日文系学科における研修旅行の実施状況を、カリキュラムとの関係により3つに分け、まとめて示しておく。

### ①カリキュラム内に科目として設定している場合

例) 安田女子大学の場合

科目名は、「日本文学実地研究Ⅰ・Ⅲ」(選択)。

研修場所 東京

授業計画 Ⅰは江戸時代の歴史的事象について。

Ⅲは東京を舞台とする明治・大正の作家、作品について。

いずれも、前期は、当該内容についての講義、後期は、東京での実地研修とその前後に研修の準備(資料集作成)とまとめ(報告書作成)を配している。

研修の日程 4泊5日

コースの概略 文京ふるさと歴史館、鷗外記念館、一葉記念館、江戸東京博物館、日本近代文学館、近代文学博物館とその周辺。

国立歴史民俗資料館、明治大学刑事博物館、早稲田大学演劇博物館、深川江戸資料館、芭蕉記念館、とその周辺。

資料集(事前)、報告書(事後)は、製本して保存。

### ②専門教育の一環としている場合

例1, 安田女子大学 書道専修コースの場合

研修場所 1年次は鳥取、紙漉きの体験。

3年次は京都(文化施設等見学)

例2, 鈴が峰女子短大 日本文学科の場合

研修目的 日本文学科新入生オリエンテーションの際、文学遺跡踏査を兼ねて、関連のある土地への一泊旅行を実施。(事前に授業で関連事項についての講義を含む)

研修場所 松山

研修コース 「坊ちゃん」の舞台、正岡子規記念館等見学。

### ③教育内容のオプションとして設定している場合

例 広島文教女子大学

研修場所 東北、「奥の細道」の跡を訪ねる。

研修目的 1～3年次生を対象に、希望者を募って実施。(参加者30人程度)

このように、近隣大学の日文系の学科でも、何らかの形で研修旅行を、その教育内容に取り込んでいる例が多いと言える。

### Ⅲ. 研修旅行の実際—比治山大学日本語文化専攻の場合—

#### 1. 日本語文化専攻研修旅行

日本語文化専攻研修旅行のねらいとするところは、現代文化学部の言語文化学科の学生として1・2年次で学んだことを実地において総括し、3・4年次の日本語文化に関するゼミナール研究(日本語文化専攻の特殊研究)へ有意義に継承できるようにすることである。このねらいの実質的な内容を専攻の特性に即してとらえ直すために、ここではまず、比治山大学の学部・学科組織と各科・各専攻の目標の確認をしておきたい。その上で、日本語文化専攻の目標と研修旅行とのかかわりについて述べることにしたい。

比治山大学は、現代文化学部のもとに、言語文化学科とコミュニケーション学科を持ち、前者は日本語文化専攻と英語文化専攻に分かれるという組織になっている。現代文化学部の目標は、刻々と変化する現代文化の諸相を理解し、そこから未来をきり拓くための創造性や独創性を持つ人材の育成である。コミュニケーション学科では、急激に変化する情報社会に対して、柔軟に対応できる能力の養成を目標に、「コミュニケーション」「社会と人間」「国際コミュニケーション」「情報」の4つを柱としている。英語文化専攻では、異文化を理解するための基礎知識の獲得、英語能力と高い国際性の養成を目標に、「語学」「言語文化」「文化」「実用英語」の4つを柱としている。日本語文化専攻では、文化の根幹としての言語に関する基礎知識の獲得、日本語を中核的観点とした日本文化の考究を中心に、日本語処理及び日本語表現の能力の養成を含めるかたちで目標を設定し、「語学」「言語文化」「文化」の3つを柱としている。

各科・専攻の目標を比較した場合、日本語文化専攻の主たる目標の中に、専攻の性格上、いわゆる「技能」の養成が前面に出ていない点是否定できない。しかしながら、このことが、知識の獲得による「認識力」や文献の講読による「思考力」のみの養成を意味するわけではない。否、むしろ、学部共通の目標もふまえ、現代日本の文化・社会の諸現象を、その背景としての歴史への視座をも含め、日本語というフィルターを通して自らの問題意識に基づき自己発見的・自己拡大的に考察する過程を通して、発想力・企画力を磨き、創造性豊かな実践力のある人材を養成することに目標が置かれていると考えられまいだろうか。この目標のとらえ方は筆者の私見ではあるが、従来の国文科との違いが、現代日本の文化・社会の諸現象を主たる対象とし、実践力の養成が重視されている点にあることを考え合わせると、この目標設定の中に日本語文化専攻の独自性を確認できると考えるのである。

このような目標を具現化するための一つの試みとして日本語文化専攻研修旅行は位置付けられることになる。すなわち、日本の文化・社会の諸現象(現在及び過去)と実地において接触することにより視野の拡大と認識の深化をめざす研修旅行を、自らの問題意識に基づいて発案し、企画・運営していく過程を通して、目標文化の真の理解と実践力の養成が可能となるのである。その意味で、将来、このような研修旅行の趣旨をくむ科目を、通常の講義・演習科目と並べてカリキュラムの中に正式に取り入れるのが有効である。そこでは、訪問地におけるホームステイ、ホームビジットをも含めて、教室外における実地研修の特性を生かした多様なプログラムが考案され実施されることもあり得よう。

以下、上述の目標と将来の見通しを勘案しつつ実施した1995年度(第1回)及び1996年度(第2回)の日本語文化専攻研修旅行について報告し、大学の教養教育における研修旅行の今後のあり方を検討していく上での知見としたい。

#### 2. 1995年度(第1回)日本語文化専攻研修旅行

## (1)実施までの経緯

ここでは、1995年度（第1回）日本語文化専攻研修旅行の実施に至るまでの経緯について略記しておく。

- H 6. 7月 専攻会議で研修旅行の基本的なあり方について話し合う。以下の3点が基本的な趣旨として確認される。(i) 教室外における実地研修の導入による学生の学習及び研究活動の活性化 (ii) 実地研究としてカリキュラムへ位置付けることを想定した試験的实施による経験と情報の蓄積 (iii) 専攻行事としての当面の位置付けによる専攻構成員の相互交流の促進 これらの趣旨をふまえ、夏期休暇中にそれぞれの教員が訪問地を中心とした案を考えてくることにする。
- 9月 専攻会議で研修旅行の訪問地について話し合う。若手県を中心とした東北地方、東京を中心とした首都圏、信州、京都・大阪・奈良・神戸などの関西地区、瀬戸内海沿岸及び島嶼部、中国地方西部、九州北部地区が候補地として提案される。予算、日程、特殊研究の3つの領域（日本語・日本語文化・日本文化）のバランスを勘案した上で、1995年度（第1回）は、関西方面（2泊3日）とすることが決定される。また、参加形式は自由参加とするが、全員が行けるよう各教員が積極的に参加を呼びかけることを確認する。尚、訪問地の選定のあり方について、「各回1コースとし毎年変える」「各回複数コースとし毎年変える」「各回1コースとし順次変えて4年間で完結する」などの案が提出されたが、今後の検討課題とされる。
- 10月 専攻会議で具体的な訪問場所について話し合う。その前提として、対象は実施時の2年次生以上とし、各分野の教員が3年次から始まるゼミナール（特殊研究）へ向けての導入を意図することを確認する。また、研修の構成は、(i) 全体研修（全員共通）(ii) 課題別研修（分野選択）(iii) 自由研修の三本立てとし、(ii)に関しては、教員（3～4名）が、それぞれの専門を生かして引率することを確認する。案として提出された訪問場所に関する細部の詰めは、実施時2年次生のチューター（4名）に一任される。
- 11月 チューター（実施時2年次生担当）会議で訪問場所・日程について話し合う。専攻各教員へのアンケートによって提出されたものを吟味し、全体研修の訪問場所として、石山寺、三井寺、国立文楽劇場展示室、国立民族学博物館を選定し、課題別研修及び自由研修についてもその大枠を設定した。実施日は平成8年3月20日(木)～22日(金)とし、具体的な日程表の原案を作成する。
- 12月 専攻会議で研修旅行の内容及び日程表の原案が確認され承認される。教授会で“日本語文化専攻研修旅行（案）”が承認される。<sup>#2)</sup>  
 専攻会議で引率教員を2名とすることが確認される。それをうけて、課題別研修を全体研修もしくは自由研修に置きかえることになり、京都文化博物館及びなんばグランド花月を全体研修へ移行することにする。また、全体研修から三井寺及び国立文楽劇場展示室をはずすこと、空中庭園を補入することが承認される。  
 日程について旅行代理店との交渉を始める。
- H 7. 1月 専攻会議で旅行代理店から提示された案について検討する。  
 2月 日程の細部について旅行代理店と打ち合わせ、旅程表を作成する。  
 3月 旅程表に従って下見を実施する。  
 4月 専攻会議で下見報告。<sup>#3)</sup>  
 学生への説明会及び参加希望者の募集開始。



- 5月 参加希望者の募集締め切り（参加希望者26名）。積み立て預金開始。
- 12月 なんばグランド花月公演日程の確定をうけて、旅程表の細部について旅行代理店と打ち合わせ、修正及び調整をおこなう。  
専攻会議で全体研修から空中庭園をはずし、大阪城を補入することが承認される。
- H 8. 1月 専攻会議で旅行代理店から提示された最終案について検討する。若干の修正を加えた上で承認される。
- 2月 学生の事前学習会の実施（2回）。しおりの作成。参加人数（学生）は22名で確定。
- 3月 教員・学生・添乗員による合同直前打ち合わせ会の実施（部屋割り／日程の確認等）
- ↓

実施 H 8. 3. 20(水)～3. 22(金)

## (2)実施内容

### ①実施概要

目 的：日本の古都京都及び新国際都市大阪の史跡・文化施設などを探訪し、現代文化とその源流及び日本語文化への理解を深める。

指導方針：（i）各専門分野の教員から推薦された史跡・文化施設を主に全体研修として、事前学習会を経て訪問する。

（ii）自由研修は、グループごとに自主的に計画を立て、実施前日までに行動予定表として提出する。<sup>#4)</sup>

（iii）国立民族学博物館では、博物館員の講話<sup>#5)</sup>を聴き、展示の見方、世界の諸民族の文化と歴史、世界の中の日本文化に対する理解を含める。

※ 以上のことを通じて、日本語・日本語文化・日本文化を柱とする3・4年次のゼミナールにおける研究への興味・関心及び意欲を喚起させる。

対 象：日本語文化専攻2年次生

期 間：平成8年3月20日(水)～22日(金) 2泊3日<sup>#6)</sup>

宿 泊 地：京都（ホテル佐野屋）

大阪（大阪東急イン）

費 用：一人当たり約5万3千円（学生の自己負担）

引 率 者：日本語文化専攻専任教員2名

### ②研修内容

上述の目的及び基本方針をふまえて、以下の内容で研修を実施した。

#### <全体研修>

(i) 石山寺：瀬田川畔に立つ、1200年の歴史を持つ当寺院を訪ね、源氏物語を始めとする中古文学、日本の建築用式、石山詣という風習等について学んだ。

(ii) 京都文化博物館：平安建都1200年事業の一つとして昭和63年にオープンした当博物館を訪ね、生活の中から芽生え、自発的にかつ自由な発想のもとに育ってきた京都文化を、歴史・産業・技術・生活・美術・工芸の各面から学び、伝統文化に触れるとともに京都の新しい文化についても学んだ。

(iii) なんばグランド花月：笑いの殿堂とも呼ばれ、全国へ“笑い”を発信している当劇場を訪問し吉本興業の若手を中心とした漫才やコントを観賞することにより、現代の大阪の言語芸能や生活文化に触れ、同時にその背景として脈々と受け継がれてきた上方の文化・芸能について学んだ。

(iv) 大阪市立博物館：大阪城本丸跡にある当博物館を訪れ、「発掘された大阪」「大陸への門戸

・難波」「中世の大阪」「町人のまち大阪」「天下の台所・大阪」「大阪の周辺農村」「大阪の学問と芸術」「大阪の芸能」というテーマに沿って分類された資料に触れ、大阪の歴史と文化について学んだ。

(v) 大阪城：豊臣秀吉によって築かれ今では大阪のシンボルとなっている当城を訪ね、本格的な大阪の町づくり及び江戸幕府成立前後の歴史について学んだ。尚、改修工事中のため外から天主閣等の姿を見ることはできなかった。

(vi) 国立民族学博物館：世界の諸民族の社会と文化を研究・紹介する当博物館を訪問し、博物館員の講話により当博物館の概要、見学の仕方を、ヨーロッパ展示を具体例として学んだ後、オセアニア展示に始まり東回りで世界を一周し最後に東アジア展示で終わる地域展示を見て回った。世界の民族それぞれが持つ慣習やものの考え方を、当博物館が主眼とする実物との接触を通して学び、あわせて、日本文化を他の文化と比較し、関連させながら見直す意義を再認識した。

#### <自由研修>

[2日目〔午前〕][2日目〔午後〕]の自由研修における各班の訪問場所を示しておく。

[2日目〔午前〕]：基本テーマは“京都市内および周辺にて日本語文化研究”

A班；直指庵・大覚寺・清涼寺・広沢池

B班；国立京都博物館・風俗博物館

C班；八坂神社・京極

D班；清水寺・京都御所・三十三間堂

[2日目〔午後〕]：基本テーマは“難波界隈にて大阪の現代文化・言語風土研究”

A班；難波プラザ・ハーゲンダッツ・千日前

B班；四天王寺

C班；道頓堀・アメリカ村・梅田・新歌舞伎座

D班；C班と同じ

### (3)研修旅行についてのアンケート調査

#### ①評価アンケート

1995年度(第1回)日本語文化専攻研修旅行への参加学生に対して、研修旅行の内容に対する評価を求めるアンケートを実施した。

#### ②調査の方法

研修最終日(3日目)の帰りの新幹線内で、調査紙<sup>(#7)</sup>を配布し、単なる評価点を示すだけでなく、今後の改善へ向けてのコメントを期待している旨を付言した。

#### ③回収率

当日中に22名中22通(100%)の回収を得た。

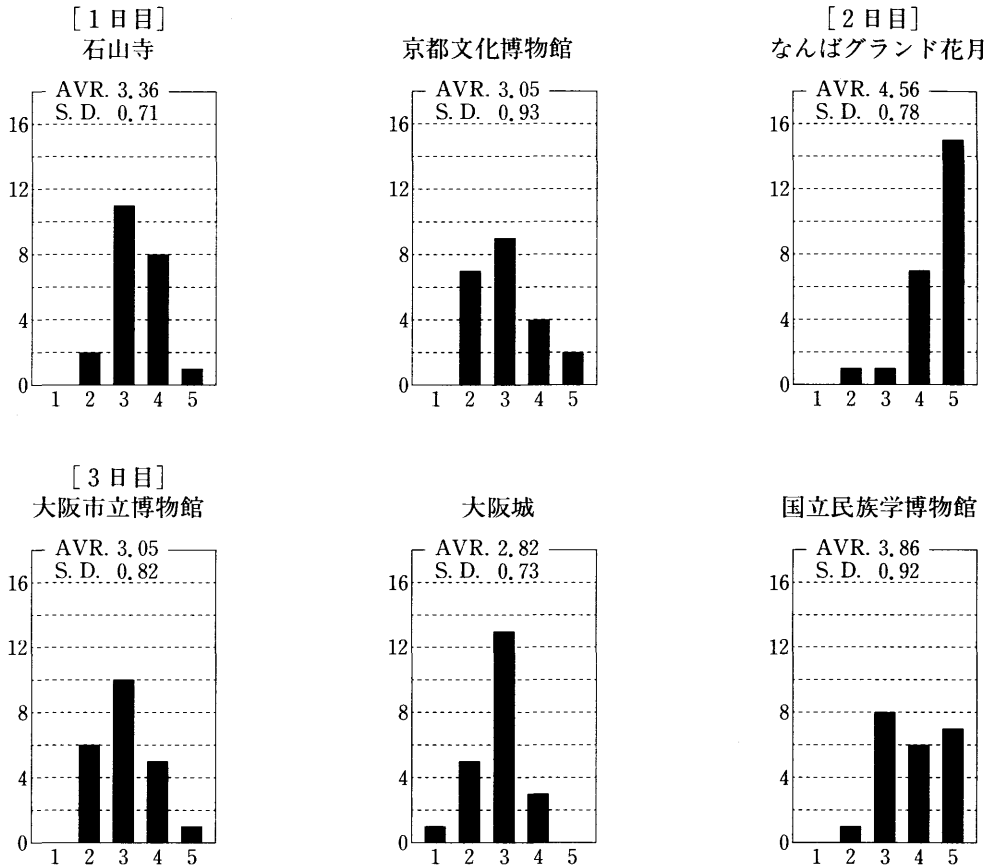
#### ④アンケートに基づく研修旅行に対する評価

5段階評価(1～5)を得点化(1～5点)し、ヒストグラムを作成すると共に、平均値及び標準偏差(得点のバラつき具合を示す数値)を算出した(図-1)。特に、自由研修の[2日目〔午前〕]及び[2日目〔午後〕]に関しては、班別評価も示した。また、この表の右端には、研修旅行の実施以後、特殊研究の希望分野がどう変化したかを見るため、各班におけるそれぞれの分野の人数を、各班の上段を研修以前、下段を研修以後として示した。尚、表中の“AVR.”は平均値、“S.D.”は標準偏差、“GAVR.”は班別平均値を示す。図-1の後には、研修旅行についてのコメントを示した。<sup>(#8)</sup>

**[評価の結果]**

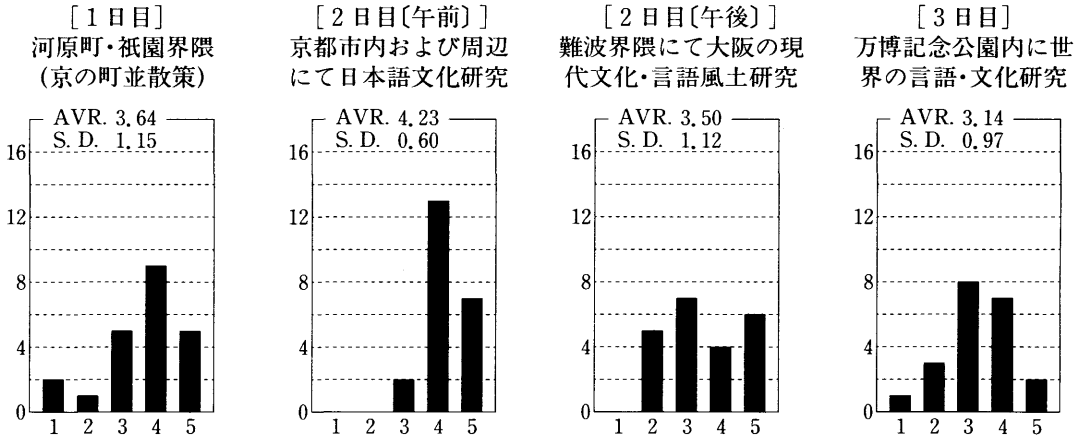
図-1 研修に対する評価

①全体研修



②自由研修

(i)全体評価



## (ii)班別評価（[2日目(午前)] [2日目(午後)] の研修）

テーマ 班名	[2日目(午前)]		[2日目(午後)]		特殊研究Iの分野		
	訪問場所	訪問エリア	訪問場所	訪問エリア	日本語	日語 本文 言化	日本 文化
A (9名)	直指庵 大覚寺 清涼寺 広沢池	嵐山・嵯峨野	難波プランタン ハーゲンダッツ 千日前	難波 心斎橋	1	5	3
					1	5	3
	AVR.	4.00	AVR.	2.44	GAVR.	3.22	
B (4名)	国立京都博物館 風俗博物館	京都駅周辺	四天王寺	天王寺	4	0	0
					2	0	2
	AVR.	4.75	AVR.	3.50	GAVR.	4.13	
C (7名)	八坂神社 京極	東山 洛中	道頓堀 アメリカ村 梅田 新歌舞伎座	難波 心斎橋 梅田	2	3	2
					2	4	1
	AVR.	4.14	AVR.	4.71	GAVR.	4.43	
D (2名)	清水寺 京都御所 三十三間堂	東山 洛中 京都駅周辺	C班と同じ	C班と同じ	0	0	2
					1	0	1
	AVR.	4.50	AVR.	4.00	GAVR.	4.25	

## 研修旅行についてのコメント

## (1)研修旅行全体について

- ・OPBやソニーのショールームのような所へ行きなかった。(A)
- ・少しハードだったかもしれないが、あっという間の3日間だった。(〃)
- ・民族学博物館を研修のはじめに持ってきてほしい。(B)
- ・3日目は全体研修ばかりで少し疲れた。(C)
- ・3日目は疲れていたのに、貸切バスでなかったら非常につまらかったと思う。(D)
- ・もっと日数が多い方がいい(3泊4日ぐらい)。(E)
- ・短い間にやるが多かったのだから、時間にゆとりをもってじっくり見てまわるようにしたい。(F)
- ・じっくり見てまわるには、京都か大阪のどちらかにしぼった方がいいような気がする。(G)
- ・桜の季節に奈良の吉野に行ってみたい。(H)
- ・いろいろなところをもっとゆっくり散策したい。(I)
- ・自由時間が考えていたよりも短く、まだ見学し足りない感じである。(J)
- ・京都にいる時間をもう少し長くしてほしい。(K)
- ・自由時間をもっと多くしてほしい。(L)
- ・できれば門限ももっとおそくするかなくすかしてほしい。(〃)
- ・研修を企画し取り計らってくださった先生方、添乗員の方々のおかげで、なんばグランド花月、国立民族学博物館など貴重な体験ができた。ありがとうございました。(〃)

## (2)自由研修のあり方について

- ・研修中は、全部バスで移動すれば(一部そうだった)いいと思ったが、終わった今では地下鉄やJRを使って現地の人にふれる機会を多くしたのは良かったと思う。(M)
- ・事前にテーマをしぼり、もっと計画的にうごいておけば、より有意義に過ごせたと思う。しかし、大枠を決めた後は、いきあたりばったりで行くのもまた楽しいものだ。在学中にもう、2、3回は京都を探索しに行きたい。大変意味のある旅行だったと思う。(N)
- ・もう少し時間の取り方について考えてほしい。2泊3日で京都・大阪の両方へ行くのは時間的に厳しい。確かに大阪の花月も魅力があるが、今回は京都だけでもよかったと思う。(O)
- ・京都は自由研修で1日かけてじっくりみたい。(P)
- ・もっと京都の街を堪能したい。京都一本にしぼってもいいのではないか。(Q)
- ・もっとゆっくりする時間がほしい。確かにいろいろな所へ行けて勉強にはなったが。(R)
- ・夕食が自由になれば、自由時間が増えたと思う。(S)
- ・もっときちんと計画を立てておくべきだった。(T)
- ・時間をもっとほしい。(〃)
- ・ゆっくりみすぎた点もあるが、やはり時間が足りない。(U)
- ・それぞれが計画を立てて好きな所に行けるので有意義だと思う。(V)
- ・“我が道を行く”という点で、自由研修に限ると思う。(W)
- ・大阪での時間をもっと取ってほしい。(X)
- ・自分の足で、自分の計画により、見学できることで、かなり自分の興味や関心に近づくことができ、とても有意義な時間だった。(Y)
- ・“自由”というぐらいだからこそ、博物館・寺院など何か目的をあらかじめ決めて行動する必要がある。(Z)
- ・大学時代の思い出に残る良い体験だった。(α)

- ・自由研修の時間が短すぎる。(β)
- ・道がわかっていない場合、移動に時間がかかってしまった。(γ)
- ・ガイドブック・参考資料はやはり役に立つ。(δ)
- ・大阪での時間がもう少しあればいいと思う。(η)
- ・目標をしっかりと定めていけば大変有意義になると思う。しかし、たくさん場所に行こうとするとかなりしんどい。(ε)
- ・“研修”という名の旅行だからこそ、いろいろな“文化施設”を見ようという気になれて良かった。(ζ)
- ・歩きすぎることになり、最初の計画に無理があったのかもしれないと思った。(η)
- ・まず、きちんと計画を立てることが大切である。(η)
- ・いきあたりばったりも必ずしも悪くないが、やはり下調べをして、おおよその計画を立てておくとても充実すると思う。(θ)

## 【結果の考察】

全体研修の6つの訪問場所に対する評価の平均値は3.45である。一方、それぞれの基本テーマを持つ4つの自由研修に対する評価の平均値は3.63である。わずかながら、全体研修よりも自由研修の方が評価が高く歓迎されているといえよう。しかしながら、標準偏差でみると、全体研修がすべて1未満で分散が小さいのに対して、自由研修では0.60と非常に分散が小さいものと1.15及び1.12と比較的大きいものに分かれる点が注目される。特に2日目の午後のおける大阪における自由研修では、研修に対する事前準備の差が班ごとにはっきり現れた結果となっている。2日目午前の京都における自由研修に全精力を注ぎ込んだ結果、準備不足も重なって午後息切れがしてしまった班がある一方、最初から大阪における自由研修を研修参加の最大の目的としていた班があったことに起因すると思われる。自由研修は事前準備を十分にこそ柔軟かつ有意義に行動できると言えよう。特に、京都に比して大阪の街は、交通手段・地理などを熟知しておかねば道に迷い易い点は要注意である。

次に、全体研修の訪問場所を個別に見ると、芸能鑑賞をしたなんばグランド花月の評価の高さと改修工事中だった大阪城の評価の低さが参加者に共通している（S. D.はそれぞれ0.78, 0.73）点の特徴としてあげられる。この点はある程度予想しえたが、3つの博物館では意外な結果が出ている。まず、近代的で視聴覚設備の整った京都文化博物館と古めかしい建物の中で旧式の展示方法を主としている大阪市立博物館に対する評価が同じ点である。また、国立民族学博物館の評価が予想外に高かった点である。大阪市立博物館と国立民族学博物館の共通点は、いずれも実物を重視し、可能な限り手に触れることを可能にしている点である。実物を見、実際に触れてみるのは実地研修の重要な留意点である。石山寺は、全体研修の平均的な評価を得ていると言えよう。

それぞれの基本テーマを持つ4つの自由研修を比較してみると、2日目午前の京都における研修が安定した高い評価を得ていることがわかる。まとまった時間が取れたことと元来の京都の人气が主たる理由であろう。しかし、班別評価を検討するとC班の2日目午後のおける大阪における研修への非常に高い評価（AVR. 4.71）も注目される。大阪の街の持つ一種独特の個性も評価を分散させるようである。自由研修の1日目及び3日目は特に班別行動をとらなかったため、班別評価は出ていないが、個人あるいは少数で行動した分、分散が大きくなったと考えられる。自由研修のうち、班別行動をとった2日目午前と2日目午後の評価の平均値は4.01であり、全体研修の評価の平均値である3.45よりもかなり高い数値となっている。

研修旅行以後に特殊研究の分野を変更した学生がB班に2名、C班に1名、D班に1名いる。B班は、自由研修の訪問場所が示しているように日本文化に高い関心を持っている。2日目午後四天王寺を訪問したのも日本語文化専攻の教員（日本文化担当）が授業で話したことがきっかけとなっている。研修旅行のみが契機となったとの判断は慎まねばならないが、1つの要因となった可能性は十分に考えられる。今回の研修旅行の主たるねらいである“3年次のゼミナール（特殊研究）へ向けての興味・関心及び意欲の喚起”の成果の一例と言えよう。

今回の研修旅行は、第1回目であり、教員主導で企画を練ってきた。その経緯については、“実施までの経緯”に述べた通りである。教員主導とした背景には、第1回研修旅行として、今後の研修旅行の基本的な枠組み作りと標準型の設定を1つのねらいとしたこと、特殊研究への導入として専攻の各分野の教員の意向を可能な限り反映させようとしたことがある。それらが明確に現れたのが6つの訪問場所からなる全体研修の設定である。特に、いわゆる“博物館”が半数を占めている点は、深くかつ広く日本語文化（日本語・日本語文化・日本文化）について学んでほしいという教員の意向を示している。学生による“博物館”の評価の平均値は3.32で、標準偏差もすべて1未

満となっており、安定した評価を得ていると言えよう。しかし、個別にみると国立民族学博物館と他の2つの評価の平均値に大きな差が見られ、再検討の必要を感じさせる結果となっている。

教員主導の全体研修のあり方に対しては「研修を企画し取り計らってくださった先生方、添乗員の方のおかげで、なんばグランド花月、国立民族学博物館など貴重な体験ができた」という積極的な評価をしたコメントがある一方で、「京都か大阪のどちらかにしぼった方がいいような気がする」「民族学博物館を研修はじめに持ってきてほしい」という企画そのものに対する問題点の指摘や要望が見られる。京都・大阪の両方へ行ったのが、先述の教員の意向によるものであること、十分時間をかけて見る価値のある国立民族学博物館が疲れのピークに達する最終日の午後になったのが、全体研修の日程上の都合によるものであることを考えると、学生一人一人のニーズに応じた全体研修を企画することの難しさを改めて感じる。自由研修に関するコメントにも「京都は自由研修で1日かけてじっくりみたい」「大阪での時間をもっと取ってほしい」「自由研修の時間が短かすぎる」など、自分たちで自由に企画を立てて行動することへの要望が見られる。率直な気持ちであろう。

しかし、単なる“自由な”研修ではなく、自由に“研修”することの意義を認識し、自由研修への積極的な評価を示したコメントも見られる点に注目したい。例えば“自由”というぐらいだからこそ、博物館・寺院など何か目的をあらかじめ決めて行動する必要がある」「自分の足で、自分の計画により、見学できること、かなり自分の興味や関心に近づくことができ、とても有意義な時間だった」などである。また、単なる“旅行”ではなく“研修”旅行である点への評価を示す「“研修”という名の旅行だからこそ、いろいろな“文化施設”を見ようという気になれて良かった」というコメントも見られる。“研修”のための旅行の1つの成果と考えられよう。

全体研修と自由研修の個々の評価の平均値は、3.54である。数値はあくまでも数値と認めつつもすべてが初めての試みであった点、教員主導で企画を立てた点、全体研修に重点を置いた点等を考慮すれば、参加学生から得たこの評価は、まずまずの健闘を示していると考えたい。また、第1回目の研修旅行として今後へ向けての経験や情報を得られた点でも有意義であった。学生・教員相方から高く評価される研修旅行実現へ向けての知見としたい。

#### (4)課題

ここでは、企画に関する基本的な枠組み（目的、対象、宿泊日数など）を前提に、今後の課題を実施時期、研修の構成、全体研修の内容の3点を中心に述べておく。

研修のねらいを3年次に始まるゼミナール（特殊研究）への興味・関心及び意欲の喚起に置くならば、ゼミナールへの分属に関する予備調査が開始される2年次後期より前に実施するの一案である。分属がほぼ終了した2年次後期の3月も悪くはないが、ゼミナール研究及びその前段階としての分属への意識を高め、研究テーマを発見する1つの契機となる場を提供する意味では、より有効と言えよう。現実的に諸条件を勘案すると、秋休みを利用するしかないであろう。ただし、半年繰り上がることにより学生の知的成熟度とそれに伴う研修内容の質の問題が生じる可能性はある。

研修の構成は、現行の全体研修と自由研修の2本立てで基本的にはよい。可能ならば今回の企画の当初にはあった課題別研修（専攻の各分野の教員が担当する）も入れたいが、現実的な種々の問題があり当面はこの2本立てでいくことになろう。しかし両者のバランスに関しては現行のままでは問題が残る。学生主体の自由研修に重点を移し、より多くの時間を配分すべきであろう。教員は全体研修の企画に使ってきたエネルギーを学生の企画立案・実施の支援に注ぐことになる。学生は企画を立てそれを実行する過程に自らの精力を注ぎ、研修旅行と主体的にかかわることになる。研修の成果が学生の自覚に委ねられる比重が大きくなるが、全体研修は一つに絞り、残りすべてを自由研修にして実施してみるのもよからう。

全体研修を実施すること自体は意義深いですが、その内容に関してはもう一工夫が必要である。その



企画の1つの前提は“自由研修では実現が難しいもの”となろう。今回、国立民族学博物館訪問の際、解説・案内をしてくれた博物館のスタッフは、教員の知人として、非公式のボランティアに応じてくれたのであるが、現地の人による講演を企画として正式に入れるのも1案である。また、もう1つの前提として、“日本語文化専攻の共通事項として欠くことのできないもの”があげられる。この点に関しては、まだ、案を持ちえていないが、少なくともそれは、“現代日本の「異文化」を、その歴史的背景をもふまえて、自らの問題意識に基づき自己発見的・自己拡大的に考察する契機を提供しえるもの”という専攻の独自性とかかわるものになろう。今後の検討課題としたい。

### 3. 1996年度(第2回)日本語文化研修旅行

#### (1)実施までの経緯

ここでは、1996年度(第2回)日本語文化専攻研修旅行の実施に至るまでの経緯について略記しておく。

- 2月上旬 研修旅行希望者募集開始(1・2年次で学んだことを実地において総括し、3・4年次の日本語文化に関するゼミナール研究へ有意義に継承できるようにするため)
- 5月上旬 参加希望者31名  
グループ編成について(グループ代表者の選出、ガイダンスの日程等の説明)A・B・C・D4班成立。
- 5月下旬 研修計画の立案について(1)  
学生が自らの企画に基づいて研修計画を立てる。  
教員からは、資料を提供し、各分野ごとに文献の紹介、見るべきスポットの紹介をする。(資料提供、書道関係美術館のリスト、明恵上人の遺跡を辿る、日本文化史で学ぶ京都の文化財と博物館、近代文学関係京都の文学遺跡、古典文学関係文学遺跡、現代芸能について)
- 6月初旬 研修計画について(2)(各グループの計画の概要提出)
- 6月中旬 研修計画について(3)(企画細目検討、日程の時間的な調整、交通手段についての検討等)
- 7月上旬 研修計画について(4)(企画決定、研修旅行の案作成の要領について)  
案作成のための事前調査について(見学場所についての資料収集、教員のアドバイスを聞く)
- 9月上旬 研修旅行について(5)(企画の変更等最終調整、案の原稿提出)
- 9月下旬 案作成(印刷仕上がり)
- 10月1～3 研修旅行実施
- 10月下旬 研修旅行報告写真集・感想文集作成

#### (2)実施内容

##### ①実施概要

目的：日本の古都京都及びその周辺の史跡・文化施設などを準備研究を経て、実地的に探訪することにより、日本文化についての専門的知見を広め、現代文化とその源流及び日本語文化への理解を確かなものにする。

さらに当地の言語文化の現状とその文化的根源を、地元研究者の講演を聞くことにより深く認識する。

(講演会の意義について一本学の日文カリキュラムの中で、手薄になっている方言研究的な観点を補うあるいは本研修の中でも国語学的な方面からのアプローチ

の欠如部分を補う意味を持っている。)

指導方針：①グループ（3人以上）を編成し、各グループごとに研修計画を作成することにより主体的な活動を促す。

②研修前の準備として、史跡についての事前調査及び史跡に関連する資料の収集を徹底させ、研修のための「資料集」を作成する。この作業を通じて資料収集の方法や専門的知見の習得を促す。

③地元講師により、当地の言語文化についての講演を聞く。

④研修後、その成果についてレポートを提出させ、「研修報告書」としてまとめる。

※ 以上のことを通じて、日本語・日本文学・日本文化を柱とする3・4年次のゼミナールにおける研究への興味・関心及び意欲を喚起させる。

対 象：日本語文化専攻2年次生

期 間：平成8年10月1日(火)～10月3日(木) 2泊3日<sup>※9)</sup>

宿 泊 地：京都(京都第2タワーホテル 2泊)

費 用：一人当たり約4万5千円

引 率 者：日本語文化専攻専任教員2名

## ②研修内容

上述の目的と基本方針をふまえて、以下の内容で研修を実施した。

### 〈全体研修〉

10月1日 19:30～20:30地元の講師による講演会

講師 寿岳章子氏

演題 京の女と言葉

場所 宿泊所にて

講師について

元京都府立大学文学部教授、現在新村出記念財団理事長

専門 国語学、婦人問題、中世日本語語彙、言語生活史、町の形成等。

著者 『京都 町なかの暮らし』草思社、『ことばづかいの昭和史』岩波書店 等多数。

寿岳氏は不断に新しい言語観を構築し続ける言語哲学者であり、しかも、女性問題にもすぐれた見識を持つ女流文化人でもある。

講演趣旨——関西人は地元の方言に対して誇りを持っていること、京都言葉に対する偏見(女性らしい、男性にふさわしくない等)を否定し、京都言葉の特徴が、ジェンダーを越えたところにあることを説く。さらに、同じ京都の中でも、その家を支配する考え方の違いによって、使う言葉の語彙に違いがあること。特に「つろく」という言葉の意味と使われ方の特徴について説明があった。「つろく」が、人間の自由な発想を抑圧する弾圧語の一種であること、それを良く使う家庭と全く使わない家庭があることが例に挙げられた。

### 〈自由研修〉

班別の計画表を略記しておく。実際の実施内容は、後の表に記した。

A班；1日目 北野天満宮 → 金閣寺 → 紫式部の墓 → 風俗博物館

2日目 京都御所 → 本能寺 → 太秦映画村 → 広隆寺 → 三十三間堂

3日目 宇治平等院 → 帰路

B班；1日目 京都 → 梅田花月(大阪) → 京都

- 2日目 京都 → 奈良 → 法隆寺 → 中宮寺 → 藤の木古墳 → 薬師寺  
→ 京都
- 3日目 池大雅美術館 → 苔寺 → 鈴虫寺 → 帰路
- C班；1日目 保津川下り
- 2日目 京都御所 → 仁和寺 → 竜安寺 → 金閣寺 → 大徳寺 → 北野天満宮  
→ 二条城 → 京都博物館
- 3日目 平安神宮 → 知恩寺 → 八坂神社 → 地主神社 → 清水寺 → 東福寺  
→ 帰路
- D班；1日目 御香宮神社 → 伏見桃山城 → 桓武天皇陵 → 桃山御殿 → 泉湧寺 →  
音羽屋
- 2日目 広隆寺 → 御所 → 二条城 → 西陣織会館 → 千本釈迦堂 → 北野天  
満宮 → 竜安寺 → 仁和寺
- 3日目 三十三間堂 → 国立博物館 → オルゴール館 → 八百卯 → 京都博物館  
→ 風俗博物館

### (3) 研修旅行についてのアンケート調査

#### ① 評価アンケート

1996年(第2回)研修旅行の際も、第1回と同様、参加学生に対して、研修旅行の内容に対する評価を求めるアンケートを実施した。

#### ② 調査の方法

研修最終日(3日目)帰りの新幹線内で、調査紙<sup>※10)</sup>を配布し、単なる評価点を示すだけでなく、今後の改善へ向けてコメントを期待している旨を付言した。

#### ③ 回収率

当日中に21名中20通の回収を得た。1名は岡山で途中下車したため、後日回収。結果的に100%の回収率であった。

#### ④ アンケートに基づく研修旅行に対する評価

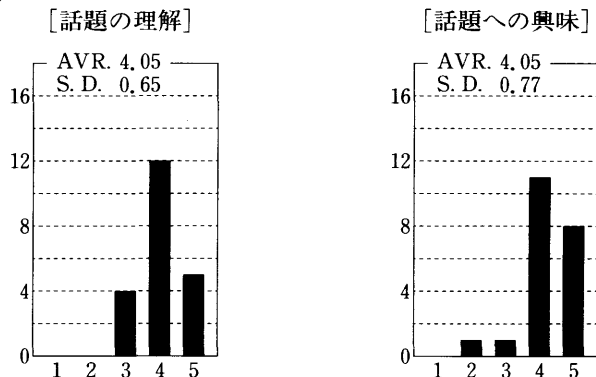
評価の方法は、第1回目と同様である。数値化による評価の結果を図-2に示した。また、図-2の後には、研修旅行についてのコメントを示した。

## [評価の結果]

図-2 研修に対する評価

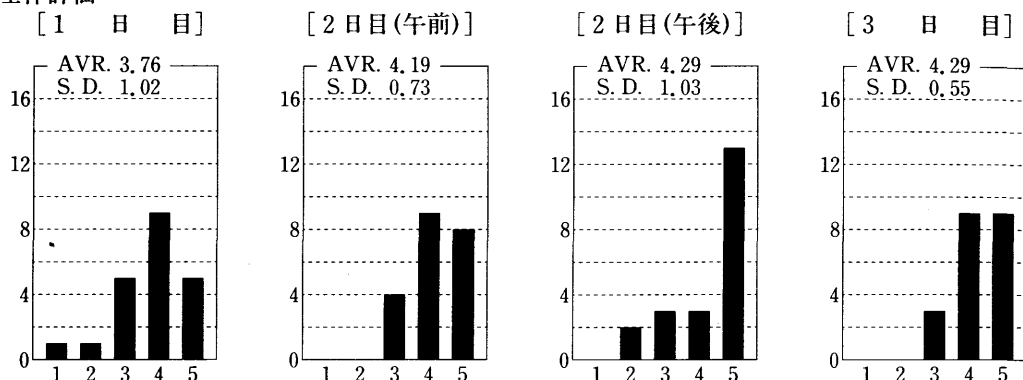
### ① 全体研修(地元の講師による講演会)

講師 寿岳章子氏  
演題 京の女と言葉  
日時 1日目(10月1日)の夜  
場所 宿泊所の一室



## ②自由(グループ)研修

## (i)全体評価



## (ii)班別評価

班名	[1日目]	[2日目(午前)]	[2日目(午後)]	[3日目]	訪問エリア
A (7名)	北野天満宮 金閣寺 紫式部の墓 平野神社 風俗博物館	京都御所 本能寺 太秦映画村	広隆寺 鈴虫寺 清水寺(地主神社) 京都タワー	三十三間堂 平等院	京都洛西 京都洛中 京都東山 京都洛南
	AVR. 3.57	AVR. 4.29	AVR. 3.43	AVR. 4.14	3.86
B (5名)	梅田花月	法隆寺 中宮寺	薬師寺 唐招提寺	京都文化博物館 (池大雅展)	大阪梅田 奈良西の京 奈良斑鳩 京都洛中
	AVR. 4.20	AVR. 4.20	AVR. 5.00	AVR. 4.40	4.45
C (4名)	保津川下り 嵐山散策	京都御所 大徳寺 金閣寺	北野天満宮 二条城 京都文化博物館	東福寺 平安神宮 知恩院 八坂神社 清水寺(地主神社)	京都洛西 京都洛中 京都洛北 京都東山
	AVR. 4.75	AVR. 4.50	AVR. 4.25	AVR. 4.75	4.56
D (5名)	御香宮神宮 伏見桃山城 桓武天皇陵 桃山御陵	広隆寺 京都御所	二条城 西陣織会館 千本釈迦堂 北野天満宮 竜安寺・仁和寺	三十三間堂 京都国立博物館 京都文化博物館	京都洛南 京都洛中
	AVR. 2.80	AVR. 3.80	AVR. 4.80	AVR. 4.00	3.85

## 研修旅行についてのコメント

## (1)全体研修について

## ①話題について

- ・女性にとってよかった。
- ・身近な話題でわかりやすかった。
- ・研究したい分野だったのでよかった。
- ・京都の街並みについて、同様のことを感じた。
- ・体験を踏まえての話で、わかりやすかった。
- ・考えさせられることが多かった。
- ・先生の気配りが伝わってきた。

## ②興味について

- ・おもしろ、おかしく話された。
- ・話し上手で、関西人らしいとほけたところがよかった。
- ・方言についていろいろなことが分かった。
- ・方言について感動しながら聞いた。
- ・方言から、女性、性差別の問題へと身近な問題から様々な問題へと発展したのでわかりやすかった。
- ・人として平等であろうとする心が、世界の全てであると納得した。
- ・身分差別をなくすというスローガンを京都の街でみかけた。京都は、特にそういうことに取り組んでいるのだろうか。

## ③全体的な感想

- ・言葉による差別があることを知った。
- ・広島弁に自信が持てた。
- ・方言を大切にしなければいけない。
- ・方言の「つろく」についての話が面白かったが、その改善の方法を個人で考えることが大切。
- ・生活環境が自分の話している言葉と密接に関係していることを知った。
- ・地方によって言葉が違い、その中でも生活の違いで言葉が違うということを、もっと勉強してみたいと思った。
- ・方言は調べてみると面白い。
- ・身近なことを例にして話されたので、方言について非常に興味を持った。
- ・先生は差別に敏感で、そして京都を大変大切に思っていらっしゃるのだと思った。
- ・先生がとても感じの良い人で大好きになった。
- ・フェミニストではないので、全てを納得できなかった。
- ・同感できないことが多かった。
- ・個人的なことが多かった。

## (2)自由研修について

## ①自分たちで計画を立てて研修に臨むという今回の企画のあり方について

- ・自分たちの行きたいところに、行きたい時間に行けるのでよい。
- ・新しい発見があり、充実していた。
- ・自分たちで調べていく機会が今までなかったので、勉強になった。

- ・少人数で計画して、行きたいところにじっくりいけた。
- ・自分たちで企画を立てていくのはなかなか楽しいものだった。
- ・計画の時点から楽しみだった。行く寺のことを詳しく調べていったので、行く意義が持てた。
- ・計画したことが実行できるのが、とても楽しく勉強になった。
- ・自主性に基づいて行うものなので、責任感もあり、とにかく自由に楽しめる。
- ・自主性が生まれてよし、友達同士の仲も深まる。
- ・時間の計画は余裕をもって立てなければならない。
- ・予定はおおまかでよい。
- ・もっと狭い範囲に絞って、じっくり見て回るべきである。
- ・楽しいけれど、京都に来たという気になれなかった。

②京都の文化について（広島と比較して）

- ・国宝級の文化に触れられる。
- ・大変貴重な文化である。
- ・歴史の重みを感じた。
- ・昔の人の価値観が分かった。
- ・日本の歴史の流れや深さに感動した。
- ・言葉のアクセントが違い、方言の違いがよくわかった。
- ・広島とはずいぶん違う文化である。
- ・広島の文化は原爆のことを中心として、平和の問題が中心だが、京都の文化は歴史が長い。都のくらしぶりや、建物の歴史に深さを感じた。
- ・広島とは規模の違う、趣深い文化だと思う。
- ・広島とはくらべものにならないくらい見どころの多い場所が多く、文化と歴史があり、大変感動した。
- ・広島は原爆で全て焼けてしまって残っているものは少ないが、京都・奈良には、国宝と呼ばれる多くの文化財が残っている。昔から国の中心地であり、守られてきたのだと強く感じた。
- ・広島にはない純日本的な文化があった。
- ・広島にはないものばかりで驚いた。（京都には、街のあちこちに有名な寺や古い建物があるし、大阪の街にはパワーがある。）
- ・文化を保つためになされる努力がすごいと感じた。
- ・伝統あるものはこれから先も大切にしていき、多くの人に見てもらって、私たちが味わった感動を感じてほしい。
- ・京都が近代的な建築で囲まれていくのを残念に思う。京文化はまだまだ深く、もっと知りたいと思った。
- ・新しい文化と古い文化の両方を知ることができた。
- ・京都はどんな街を目指しているのかと考えさせられた。
- ・ぜひもう1度行きたい。

## 【結果の考察】

全体研修については、講演の話題について、興味についていずれも評価の平均値が高い数値を示しており、しかもコメントに現れているように、方言について、言葉について身近なところから興味を持ちはじめたことが良くわかる。ただ、2、3と低い評価を出したものは、「フェミニストではないので、すべてに同感できなかった」、「同感できないことが多かった」といった講師の話に対する思想的な違和感を示したもので、また、「個人的なことが多かった」といった講師の体験を踏まえた話に対して語り方に違和感を示したものである。これは、いずれも、講師の話を理解した上で、講師の話を批判的に受け止めたものであり、人の話を聞くときの当然あるべき一つの姿として、受け取ることが出来る。

自由研修については、各グループごとの企画で、全体的な考察がしにくいところがあるが、全体の平均値で見ると、概ね4・5の高い数値を示しており、学生の満足度を良く表している。その中で、1・2と低い評価を出しているのは、主に自分たちの企画の立て方や、道に迷って目的地に行けなかったといった企画実施上のハプニングが生じた場合などである。評価の平均値が、1日目3.76とやや低く、2日目以降、特に午後から3日目にかけては4.29と高い数値を示しているのは、そのことと深い関係があると言ってよい。目的地を回るのに段々要領を得てきたためと考えられる。

班ごとに見てみると、D班は、準備段階から、研修のテーマの1つに「祭り」の鑑賞を挙げて、かなり念入な資料収集をし、目的意識を明確化させていたため、そのぶん、実際の研修で求めるものも高く、評価が厳しくなっているところもあると思われる。1日目は、御香宮神社の祭りが夜で見られなかったこと、いろいろなものを見たが、「まとまりがなかった」といった批評がコメントに寄せられた。その反面、2日目午後の仁和寺においては、年2回の名宝展を見ることができて、その感動がコメントに強調されていた。それに対して、A班は、対照的に日程がなかなか決まらず、研修の目的に曖昧なところがあった。そのため、全体的に京都の主だった史跡を巡るといった形の日程となった。それが反映しているのか、評価の視点が曖昧であった。「京都御所に行けてよかった」、「多くの寺を見たが、1つ1つの寺のことを良く知ってからもう1度きたい」といったコメントが寄せられていた。だが、帰ったあと、今回の旅行が非常に面白かった、行ってよかったという声を寄せたのもこのグループであったことも付け加えておきたい。行く前は、いつも一緒のメンバーではないし、どうなるかと不安だったが、行ってみたら面白かった、またみんなでどこかへ行きたいということであった。

B・C班は、A・D班に対して、全体として評価の平均値が高い。B班は研修の目的が明確であり、とにかく関西文化の様々な面に触れるということを目標に、1日目は「大阪・笑いの文化」、2日目は「奈良・古代の文化」、3日目は「京都・池大雅展」という具合に、的を絞って明確に企画を立てていた。しかも、変化に富んだ計画でそれぞれに楽しんだようである。そのため、いずれも充実した研修時間を過ごしたようで、評価の数値は、3を1回出したものが1人いるのみで、後はすべて4・5に集中していた。また、C班は、1日目保津川下りで、他班とは異なり、自然という風土に根ざした京都の余暇活動を実体験する体感型の企画を取り入れて計画に変化を持たせた。後は、御所周辺、北野天満宮付近、八坂神社付近と、一般的な史跡巡りコースの1つを辿っているが、コメントを見ると、「二条城、博物館は思ったより良く、とても時間をかけてみた」等、研修に集中したようである。また、「保津川下り」については、「テストのぴりぴりした気分が一気に解消されるようないい景色だった」といったコメントもあり、計画にめりはりがあったことを感じさせる。評価も2を1回出したものが1人いるのみ（2を出したのは、昼食で京料理が食べられなかったことによるらしい。）で、後は4・5に集中している。

今回の研修旅行は、第1回と違って、研修の計画を、学生自身がグループに別れて、グループごとに立てていくというやり方を取った。このことについては、学生たちの満足度は大変高かった。特に、自主性、友達との人間関係の深まり、実践的な知識の修得といった面で、研修旅行本来の「知育」「情育」「意育」という教育目標をある程度達することが出来たのではないと思われる。

とりわけ、新しい文化と古い文化が葛藤する現代文化の最先端の現場を、伝統的な文化を守ってきた「京都」という典型的な都市空間の中で、実体験を通して感ずることが出来たことは、大変大きな収穫である。そのことは、「新しい文化と古い文化の両方を知ることが出来た」といった感想や、「京都はどんな街を目指しているのか」といった問題意識に、見る事が出来る。また、「京都」という「異文化」を通して、「広島」という「自文化」を捉えなおす目を開かれたことも重要であろう。あるいは、過去の歴史的遺産という「異文化」の背景に触れたことは、現代日本の文化・社会の諸現象という「自文化」を大きな視野から捉えなおすことに繋がった。その視野をさらに拡大していけば、そこに外国という「異文化」への視点の開眼もあるであろうと期待される。

#### (5)課題

以上のように、学生の満足度は高かったが、それに対して、教員の評価はそれほど高くない。それは、特に「智育」という場合の「智」の内容である。それは、主として学生たちの立てた研修計画の内容をさす。今回の企画では、研修計画立案の段階で教員が関わり、指導、助言をして、学生の問題意識を深めていき、それを計画立案の上に反映していくということがひとつのポイントになっていた。つまり、教員としては、そういった指導の過程を経ることによって研修の目的を1つのテーマに絞らせ、そのテーマに従って求心的な計画立案をたてさせて実地調査的な傾向の強い計画へと誘導したいという意図があったのである。

ところが、実際は、その指導が旨く行かなかったために、研修のレベルが低いままに止まってしまったと言える。その原因は、1つは教員の示した幾つかの求心的な計画の立て方(明恵上人の遺跡を辿る、とか梶井基次郎の文学遺跡を辿るといった例)に、学生がほとんど関心を示さなかったことによる。2年次の学生にそういった専門的な問題を意識させるには、今のカリキュラムの年次配当の流れのなかでは無理があるということである。それを求めるなら、やはり事前の講義や興味を喚起させるための、何らかの誘導をする必要がある。もう1つは栗作成のための資料収集の際、ほとんど指導できなかったことによる。これも、やはり、教員が学生と一緒にあって、資料調査の方法を教えることが必要である。ただ、今の状態では、教員も、学生も、課外にそういった時間が十分にはとれなかったというのが実情である。もし、そういった専門的なレベルを望むとすれば、こういった実地研修をカリキュラムのなかに組み込んでいくしかないであろう。

また、逆に、2年次の半ばで行う、教育内容のオプション、すなわち狭い専門意識に縛られずに、自由に「異文化」を理解する態度を身につけるといゆるやかな指導を前提とした教育企画としてこれを位置づければ、ある程度の成果を得たということもできるかもしれない。今回の企画では、何よりも学生の満足度が高かったことが特徴で、このことは、今後の学習意欲の向上に繋がっていく大事な要素として評価すべきではないかと考える。<sup>#11)</sup>大衆化した大学ということを考えてとき、こういったゆるやかな形の指導が現実的だという考え方もあるのではなかろうか。



## おわりに——今後の展望——

今回、大学における研修旅行の意味について考えてきたが、この問題は、大学の日文系の学科におけるカリキュラムを考えると、重要なポイントになると思われる。特に、大学の国文科で行われてきたこれまでの指導の歴史を踏まえながら、新たな指導の体制を発想していく上で重要である。ただ、日本の大学教育の歴史を考察することが困難なのは、その流れが大きく2つの時点で断絶しているのではないかと思われるからである。1つは第2次世界大戦の前後、1つは大学紛争の前後である。学生指導の実態に触れた大学教育史ということは、これまであまり考察の対象にならなかったために、資料収集に困難が予想されるが、それだけに、逆に今、大学の新たな方向の模索のためには、是非とも押さえておく必要のあるところだとも言える。今後の課題の1つとして、国文科の学科で行われてきた指導の実態調査を挙げておきたい。

また、それに伴って、現在の日文系の学科においては、どのような指導目的を挙げて、どのような新しい試みをしているか、研修旅行実施の実体を含めて調査しておくことが必要である。これについても、全国の大学について、実態調査を試みたい。

現在、時代の変化を反映して、大学から国文科というものがなくなりつつある。それは、大学が教養教育を手放したことと深い関係があるであろう。大岡信は、雑誌『文学』の座談会(前掲)で、「単純に言う、教養を持つということは、少なくとも自分の民族が持っていた言葉、日本人で言えば日本語ですけれども、日本語の過去におけるさまざまな作品群、それから歴史その他の日本語で語られたものの総体がありますね。そういうものについて多少とも興味を持って、自分の興味を持ちうる範囲内でいいんですけれども、それについて多少とも時間の幅を持って、百年なり、二百年なり、三百年なり、人によっては千年前のことまで含めて、幅、厚みを持った日本というものを、言語を通じて知るといえることが、すなわち教養だと思っているんですよ。それ以外に教養ってないのじゃないかという気がする。」(P17)と述べている。また、川本皓嗣は、「結局、教養というのはいちばん根底的には自国語を知ること、あるいは自国語に責任を持つこと——。」(P18)とも述べている。また、国際化ということについても、大岡は、「僕のほんとにけちくさい体験でいえば、始めて行くところをふくめて、わりと僕は外国へ数えてみたら行ってるんですよ。(中略)その時々で何かしゃべれとか、講演してくれと言われることがありますね、突然。そのとき僕が非常に感じるの、向こうの人が知りがっていることの唯一のものといっているのは、日本のことなのです。だから、日本のことを知らないで向こうへ行った人は何をしゃべるのか。日本のことも語れないくせに、俺たちの国のことが何でお前、わかるの、というのが当然の反応なの。」(P18)と述べている。おそらく、現代の大学における教養教育の根幹に係わる大事な発言だと考えられる。

ただ、国文科の消滅の一端には、「文学」という従来の概念が急速に魅力を失ったことも関係があることは否めない。その点、比治山大学の現代文化学部言語文化学科は、そういった社会の動向を踏まえながら、従来の「文学」を「言語文化」のひとつとして新しく捉えなおしたという意味で、時代に即応した教養教育の場として位置づけることが可能である。「自国語」を知り、それを国際的な場で語る英語能力を身につけ、さらにその能力を発揮するコミュニケーションの場を開いていくという、時代の養成に叶った構成を持つと言えよう。そこにさらに新しい指導の体制を築くことが、今後の課題であろう。

現在は、小・中・高においても、新しい教育の試みが様々に行われている。『国語科教育』43集(平成8・3、全国大学国語教育学会)掲載のシンポジウム“風土と言語文化”(P24~38)において、静岡県の高校、中学校で行われた郷土教材を使用した授業の試みが提案されている。「静岡の言語文化とその学習材化」(静岡大学)、「郷土教材の開発と課題追及学習の展開」(静岡県立川

根高等学校)、「地域教材の開発と中学校における選択国語科の授業」(藤枝市立藤枝中学校)の3例がそれである。いずれも郷土を舞台とした古典や近現代の作家の小説や、方言などを対象として、フィールドワークを含めて、様々な方向からアプローチを試み、言語文化についての理解を深めるというねらいを持っている。その授業のねらいについて、この3論文は、それぞれ「言語文化」を生み出した郷土の「風土」と「人間」の関わりを知ること、あるいは「教科書教材が生徒の生活実感からかけ離れていて、興味・関心をもって取り組み難くなっていること」を踏まえて、郷土の言語文化を取り上げることで「生徒の生活実感や問題意識に触れ合うものを求め」ということ、「郷土に係わる教材を扱うことによって、古典が郷土に現在も生きていることを生徒に実感させることが出来るのではないか、そのことが古典を身近に感じることにつながるのではないか」といったことを述べている。そこには、「自文化」の理解と「異文化」の理解の相互作用が真の文化理解を深めていくということにつながるといふ共通した認識がある。

また、これらの授業形態に注目すると、これらの試みにおいては、いずれも、言語文化に対する、生徒の主体的な取り組みを捉えており、「個人学習」に結びつけていくという方向を取っている。そこにあるのは、課題発見的、課題追及的な授業の設定の仕方であり、その過程では、教室の外に、作品の舞台を訪ねたり、図書館で資料の調査をしたり、かなりアクティブに動きながら、対象へのアプローチを進めていることが特徴である。こういった教育を受けた生徒を受け入れていくためには、大学においても従来の講義形式に加えて、多様な授業形態が模索される必要があることが痛感される。

現在、21世紀へ向けての大学教育のあり方が、ソフト・ハードの両面から問われている。特に、ソフト面の改革・整備は緊要な課題となっている。その課題解決へ向けての一助とすべく、大学における授業形態の新しい形を創造する取り組みの具体例として、今後も日文系コースにおける研修旅行のあり方に関する知見を深めていきたい。

## 〔注〕

- 1) 倉地曉美「学習者の異文化理解についての一考察—日本語・日本事情教育の場合—」、『日本語教育』71号, 1990, P. 165.
- 2) “日本語文化専攻研修旅行(案)”の「日程及び内容」の表を〔資料〕(1)に掲載した。
- 3) 下見報告の資料を〔資料〕(2)に掲載した。
- 4) 行動予定の書き込み用紙(日本語文化自由研修計画書)を〔資料〕(3)に掲載した。
- 5) 引率教員(戸田)の知人で、同博物館第3研究部に所属する新免光比呂氏のボランティアによる。氏は、主に東ヨーロッパの宗教に関する研究を行っている。
- 6) 1995年度(第1回)日本語文化専攻研修旅行の「行程表」を〔資料〕(4)に掲載した。
- 7) 調査紙B 5版2枚(研修旅行についてのアンケート①全体研修/研修旅行についてのアンケート②自由研修)を〔資料〕(5)及び〔資料〕(6)に掲載した。
- 8) コメントは、アンケート①全体研修の(Ⅲ)とアンケート②自由研修の(Ⅲ)に記述されたものである。
- 9) 1996年度(第2回)日本語文化専攻研修旅行の「行程表」を〔資料〕(7)に掲載した。
- 10) 調査紙B 4版1枚(研修旅行についてのアンケート)を〔資料〕(8)に掲載した。
- 11) 研修旅行の事後活動として、「研修旅行報告写真集」と「感想文集」の作成を行った。特に、前者の作成過程においては、班員間あるいは班の間の相互交流が見られ、作成過程が「異文化」体

験の共有の場として機能した。全体研修の講演会ビデオを含めて、これらの研修結果の報告は、今回参加できなかった学生，次回参加する学生が「異文化」体験を共有する手段として有効に活用したい。

本稿は，第Ⅰ章，第Ⅲ章の2節を戸田が，第Ⅱ章，第Ⅲ章の3節を秋枝(青木)が，また，「はじめに」と「おわりに」，第Ⅲ章の1節は両者による検討を経て，前者を秋枝(青木)が，後者を戸田が執筆した。

〈キーワード〉

「異文化」の理解／研修旅行／大学の教養教育／日文（日本語・日本文学・日本文化）系コース／日本語文化専攻

（言語文化学科 日本語文化専攻）

（1996. 11. 6 受理）

## 〔資料〕

## (1) 日程及び内容

		日	程(案)	研修テーマの主要分野
3月20日 (水)	午前	(大 阪)	広島発  〈全体研修〉＝世界の民族と文化 国立民俗学博物館	日本文化・世界の文化  a: 近・現代文学 b: 世界の文化 c: 日本文化 d: 日本文化 など  A: 日本語 B: 日本語 C: 近世文学
	午後		〈自由研修〉＝言語文化・一般文化 a: 国際児童文学館/b: 国立国際美術館/c: 日本庭園/d: 日本民芸館などの万博公園内の 文化施設で研修	
	後		〈課題別研修〉＝日本の芸能(文楽・歌舞伎・ 落語・新劇など) A: 浪花座 B: なんばグランド花月 C: 国立文楽劇場	
	夜		(大阪泊)	
3月21日 (木)	午前	(大 阪)(京 都)	〈自由研修〉＝大阪の風土と文学 a: 文学遺跡/b: ヨーロッパ村・アメリカ村 など	a: 近世・近代文学 b: 現代文化 など  近世文学・芸能  中古・中世文学
	午後		〈全体研修〉＝古典芸能 国立文楽劇場展示室	
	午後		〈共通研修〉＝古典文学(瀬田文学) 石山寺(紫式部・源氏物語) 三井寺(平家物語)	
	夜		(京都泊)	
3月22日 (金)	午前	(京 都)	〈自由研修〉＝参加者の個別テーマ	日本語文化  A: 日本語・日本文化 B: 京都の文化と文学 C: 中古・中世文学
	午後		〈課題別研修〉＝日本語文化 A: 東山文化 B: 京都府京都文化博物館 C: 京都御所	
	後			
	夜		広島着	

## (2) 下見報告資料

日本語文化専攻研修旅行下見報告

二年次生チューター代表 戸田

期日：H7. 3 / 22(水)～24(金)

場所：石山・京都・大阪

### I. 交通手段……おおむね問題はない。

- ・JR 石山駅でのバスへの乗り換え（路線番号別の乗り場なし／本数はかなりある）
- ・大阪千里の民族学博物館へは予定通り貸し切りバスがよい（コインロッカーが少なく小さい／公共交通機関でもかなり時間がかかる／民博へのバスの乗り入れは可）

### II. 宿泊施設

ホテル佐野家（京都）：JR 京都駅から地下街を歩いて約3分。交通の便は非常によい。和風の旅館だが意外と大きい。

大阪東急イン（大阪）：JR 大阪（梅田）駅から地下街を歩いて約5分。交通の便はよい。中級クラスのホテル。

### III. 研修訪問地及び文化施設（全体研修）について

- ① 石山寺：西国三十三ヶ所観音第13番札所。幅広い分野の研修が可能。(1)文学（紫式部その他女流文学者）(2)語学（石山寺一切経の訓点）(3)文化（真言密教、石山寺一切経の書写事業）など。帰りのバスの便よし（約10分間隔）。
- ② 京都文化博物館：京都の歴史と文化を展示。常設展示場、美術館、映像文化センターの3つの機能が中心。その他、1Fには、江戸末の京格子の店屋の通りを復元。また、そこでの「商い」は「京ことば」で。建物が近代的で、展示方法も視聴覚面でかなり充実。情報サービスコーナーで自由検索可。展示テーマは別紙参照。常設展の他、特別展も。研修後、河原町方面への散策もし易く便利。⑥との対比も有意義。
- ③ なんばグランド花月：夜の部（PM6：50～8：40）を鑑賞。客の入りは平日木曜日の夜で8割程度。PM6：30頃団体入場可。プログラムは三部構成。(1)コント・漫才（3組40分）(2)日本芸能一般（浪曲、日本舞踊、邦楽など40分）(3)コント・漫才（2組30分）漫才・コント以外の芸能もある。吉本の人気タレントが最低2組は登場か。関西の方言と大阪の芸能の現在を体験できる。役者と客（ファン）の関係も興味深い。客層は子供から年輩者まで広く、それに合わせて役者も多彩。近くに松竹系の浪花座、国立文楽劇場、新歌舞伎座などがあり、芸能の町大阪の雰囲気あり。ホテルへ帰るには、地下鉄一本で15分程度。
- ④ 大阪市立博物館（大阪城内）：大阪の歴史と文化を展示。趣向は②と同じであるが、建物は古い（旧広大理学部風）。テーマは「発掘された大阪」「大陸への門戸・難波」「中世の大阪」「町人のまち大阪」「天下の台所・大阪」「大阪の周辺農村」「大阪の芸能」「大阪の学問と芸術」「大阪の芸能」と豊富。展示方法はやや古いが内容は充実。特別展あり（例：歴史の中の淀川）。バスの駐車場から歩いて10分程度。同じ敷地内に大阪城天守閣があり、観覧できる（別料金）。

- ⑤ 空中庭園（新梅田シティ「梅田スカイビル」内）：④の直後に行くとその近代的な高層建築物が印象的。空中生活を追い求めてきた人類の足跡と未来を回廊展示。屋上開放展望台（170 m）からは、新国際文化都市をめざす大阪の現在が一望できる。④の知識を空から確認できる。現代文化学部の学生としての意味はあろう。地下一階の滝見小路は、大正末期から昭和初期にかけての町並みを再現。いずれにせよ、この施設は、現在、大阪の新名所になっているらしい。
- ⑥ 国立民族学博物館：世界の諸民族の生活や文化を展示。一周すると約4.5kmあり広大。映像資料が特に豊富。オセアニア、アメリカ、東アジア（含む日本）などに分けた地域展示と、言語、音楽など特定の地域に限定しない通文化展示に大別される。常設展の他、特別展、企画展あり。言語文化学科の学生としての研修効果は期待できそう。同敷地内に、日本庭園、日本民芸館など文化施設多数（別料金）。展示テーマは別紙参照。

#### IV. その他

### (3) 日本語文化自由研修計画書

日本語文化自由研修計画書（2日目） ※ 3月21日(木)朝（出発前）までに提出  
〔京都〕

日時：平成8年3月21日(木) 午前 : ~ :

方面：

同行者：

訪問場所と研修内容（特殊研究Ⅰ〔3年次〕との関連、その他調べたいこと）：

〈訪問場所〉      〈研修内容〉

①

②



	<評価>	<意見・コメント>	<有無>
[1日目]			
石山寺	1 2 3 4 5		有 無
京都文化博物館	1 2 3 4 5		有 無
[2日目]			
なんばグランド花月	1 2 3 4 5		有 無
[3日目]			
大阪市立博物館	1 2 3 4 5		有 無
大阪城	1 2 3 4 5		有 無
国立民族学博物館	1 2 3 4 5		有 無
(Ⅱ) もし可能ならば、全体研修の訪問場所としてどのような史跡・文化施設を付け加えたいですか。			
(1) 今回のコース(京都・大阪方面)の場合			
(2) 奈良・神戸などを含めた近畿圏の場合			
(Ⅲ) その他思ったこと、意見、示唆などを、自由に書いて下さい。			

#### (6)研修旅行についてのアンケート②自由研修

※3月22日(金)実施

氏名

- (Ⅰ) 自由研修についての自己評価
- (a) 主な訪問場所を書いて下さい。
- (b) 以下の基準で、1～5の数字に○(マル)をつけ、自己評価をして下さい。
- 1 無駄であった    2 あまり有意義でなかった    3 普通    4 有意義だった  
5 たいへん有意義だった
- (c) コメントを書いて下さい。



	<主な訪問場所>	<自己評価>	<コメント>
[1日目]			
河原町・祇園界隈 (京の街並散策)		1 2 3 4 5	
[2日目〔午前〕]			
京都市内および周 辺にて日本語文化 研究		1 2 3 4 5	
[2日目〔午後〕]			
難波界隈にて大阪 の現代文化・言語 風土研究		1 2 3 4 5	
[3日目]			
万博記念公園内に て世界の言語・文 化研究		1 2 3 4 5	



(Ⅱ) 京都・大阪方面で、外国人にぜひ見てほしいあるいは案内したいと思う史跡・文化施設はどこですか。

(Ⅲ) 自由研修のあり方について、意見・コメント等を自由に書いて下さい。

### (7) 行程表(第2回)

目次	月日	曜日	行程表	宿泊・備考
1	10 / 1	火	ひかり32号 10:32 広島  京都……京都第2タワーホテルへ荷物を置く……ホテル……自主研修……ホテル(泊) 8:32	【京都市内】 京都第2タワーホテル 京都市下京区東洞院七条下ル TEL075-361-3261
2	10 / 2	水	*ホテルにて朝食 京都第2タワーホテル………[終日] 自主研修………(夕食自由)………ホテル(泊)	
3	10 / 3	木	*ホテルにて朝食 京都第2タワーホテル……京都市内及び周辺自主研修……京都駅八条口改札口 14:00集合 京都  広島 14:47	

### (8) 研修旅行についてのアンケート

※10月3日(木)実施

日本語文化のカリキュラムをより充実したものにしていくために、意見やコメントを聞かせて下さい。

#### (Ⅰ) 講演会について

a 以下の基準で、1～5の数字に○をつけ、評価して下さい。

1 ひどい    2 あまりよくない    3 普通    4 よい    5 たいへんよい

b それぞれについて、できるだけ意見やコメントを書いて下さい。

評 価

意見・コメント

(1) 話題についていけたかどうか。    1 2 3 4 5

(2) 興味深くきけたかどうか。    1 2 3 4 5

(3) 今回の講演について感じたことを率直に述べて下さい。

#### (Ⅱ) 各グループの研修の内容について

(a) 主な訪問場所を書いて下さい。

(b) 以下の基準で、1～5の数字に○をつけ、自己評価して下さい。

1 無駄であった    2 あまり有意義でなかった。    3 普通    4 有意義だった    5  
大変有意義であった

(c) 意見・コメントをそれぞれの欄に書いて下さい。

〈訪問場所〉	〈自己評価〉	〈意見・コメント〉
[一日目]	1 2 3 4 5	
[二日目 午前]	1 2 3 4 5	
[二日目 午後]	1 2 3 4 5	
[三日目]	1 2 3 4 5	

(Ⅲ) 今回のような、自分たちで企画をたてていく研修旅行のあり方について、どのように思いましたか。

(Ⅳ) 訪問地の文化について、どのように思いましたか。(広島に住む人間として)